

営農情報

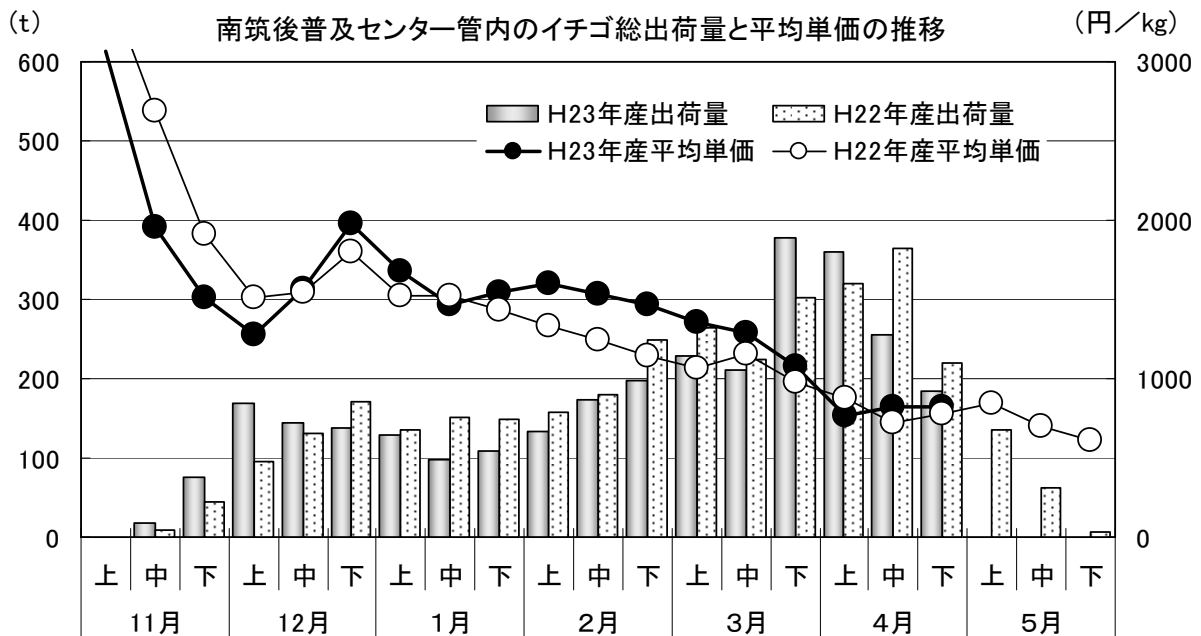
第1号 平成24年5月10日発行

(イチゴ)

J A 福岡大城
南筑後普及指導センター

3番果房は3月下旬～4月上旬にピークとなりました。ピーク時期は、日照時間が長く果実の着色が非常に早かったため、収穫遅れが散見されています。これから4番果房が増加すると思われますので、着色基準を守り、傷み果が発生・混入しないように、収穫・調製作業には注意をし、最後まで品質維持に努めてください。

親株は立ち上がりやや遅かったものの、ランナーは3～5本発生しています。ランナー発生が盛んな5月は定期的な炭そ病防除が必要です。現在、多くの親株床でアブラムシが確認されていますので、炭そ病と併せて適期病害虫防除に努めましょう。



本ぽ管理

品質保持のため、収穫間隔に留意し、着色基準の厳守に心がける。

- 収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守して行う。収穫日の間隔は短くする。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねは避け、直ちに低温の場所に移す。
- 軟果防止のため、収穫前日の多量かん水は避け、収穫後の少量多回数かん水に努める。
(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7～1.8、軟果が多い場合は2.0程度)
- 傷果防止のため、収穫が終了した果梗は除去する。
- 黄種果・軟果対策のため、果実側に伸び上がっている心葉のつみ取りを随時行う。
- 収穫終了後は株を切り、病害虫の温床とならないよう1週間程度ハウスを密閉する。

専用親株の管理

- 最近、親株床でアブラムシの発生が多く、クロケシツブチョッキリも散見される。また、今後はカキノヒメヨコバイやうどんこ病の発生も懸念されるため、病害虫の適期防除を実施する。
- 専用親株は「炭そ病」に感染している可能性が高いため、**定期的な予防防除**を行う。
- 「炭そ病」は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
(特に多湿になると伝染が増加するので、降雨前の予防散布は重要)
- プランター等で親株を育成している場合は、ランナー発生促進のため、かん水と追肥を行う
(追肥：1株当たり I B化成5粒程度を5月上旬までに施用)。

育苗準備

- 育苗床は、風通しが良く・浸冠水のない排水良好な場所を選定し、排水対策をする。
- 苗の徒長防止、「炭そ病」予防のため、ポット間隔を広く取れるように育苗床は十分な広さを確保する(ポットの中心間隔を18cm程度確保する)。
- うねは、中央部をやや高くし(かまぼこ状)、水がうね上に溜まらないようにする。
- 床面には、古ビニルを敷き、さらにポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

培養土準備

- 培養土は、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- 培養土量の目安は、8,000鉢あたり3.5寸ポットで**4 m³**、3寸ポットで**2.5 m³**とする。
- 苗本数は多めに準備する。

鉢上げについて

【さしポット】

- 親株床は早めに全面マルチ+稲わら被覆を行う。
(ランナーが多数発生すると作業がしにくい)
- 稲ワラ被覆を行った後、かん水施設を設置し、採苗1週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- 乾燥状態では親株やランナーの発生が抑制されるため、乾きすぎに注意する。



「全面マルチ+稲わら」

【すけポット】

- 根がこぶ状になった苗を鉢に受け、海苔みず等で止める。
- 大き過ぎる太郎苗は鉢上げせず、全葉を除去する。
- ランナーが極端に細い子苗は使用しない。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないようにかん水を行う。
- 鉢受けは5月末までに終了する目標で行う。
- 鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、「すけポット」苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。
- 軟弱徒長防止、「炭そ病」予防のため、鉢受け期間中の子苗への追肥は控える。



農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!